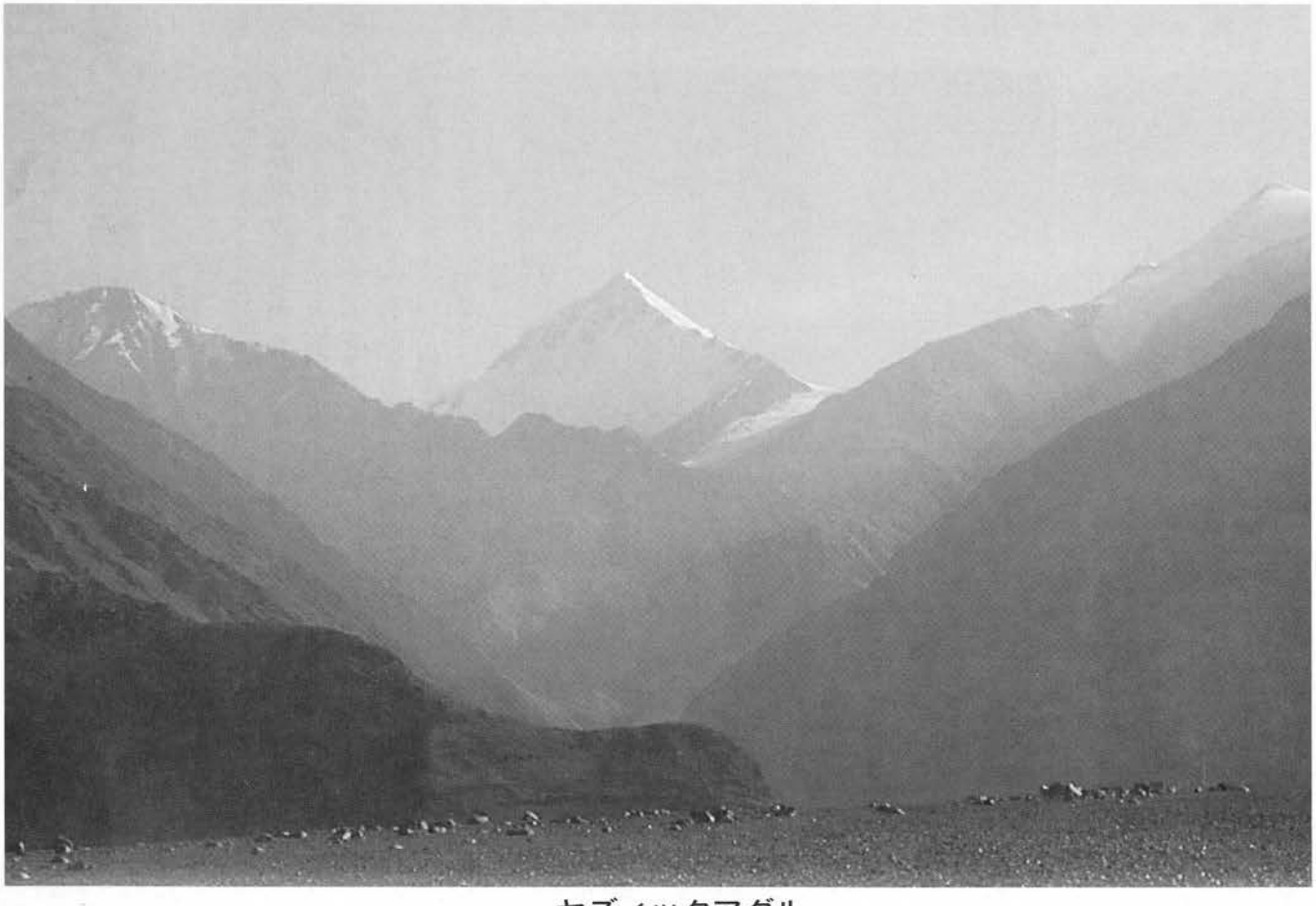
① 毎月25日発行

山と博物館

第５６巻　第６号　２０１１年６月２５日　　市立大町山岳博物館



ヤズィックアグル

ヤズィックアグル ～６７７０ｍの未踏峰～

三戸呂　拓也

中国新疆ウイグル自治区崑崙山脈にそれはある。「高校生に夢を！」を趣意に、今夏に未踏峰踏破を目指す登山隊が、長野県山岳協会主催のもと発足した。登山隊は信濃高等学校教職員山岳会の会員を中心に構成されており、長野県出身であり、以前教職に就いていた自分も隊員として参加できることになった。

自分が今回、隊員としての参加を熱望した理由は三点。まず、目指す山が６７７０ｍの標高に加えて未踏峰であること。誰も登ったことのない山を目で見て身体で感じ、また誰も立ったことのない山の頂を自分の足で目指すことに、大きな魅力を感じた。次に、若者に向けてのメッセージを持つ登山隊であること。自分がこれまで培ってきたものを発揮し、その目標につながるのであれば、貢献したく思った。最後に、故郷長野の登山隊であること。故郷を愛し、未熟ながら登山を志す人間がいることを伝えたい。

また今回隊長を務める松田大氏は、大町高校山岳部時代の恩師であった。自分に登山の魅力を伝えてくれた一人である。その繋がりに大きな意味はないかも知れないが、この縁も温かいものであり、この登山を通して絆となるものだと感じる。全ての巡り会わせに感謝し、それを表現できれば、と思う。

最後に、自分が参加のきっかけを得たのは、前山岳博物館館長、柳沢昭夫氏のお別れ会でのことであった。自分に今登山との出会いをくれた柳沢氏と博物館に感謝したい。多くの方に応援してもらえる登山隊となるよう、尽力したい。

飛州新道（飛騨新道）の道筋と庄屋の槍ヶ岳山行記

穂苅　貞雄

飛州新道は、飛騨信州の交易の最短の道として岩岡村庄屋、岩岡伴次郎親子三代に引き継がれて開拓されたものである。

小滝より1時間30分程度歩いた地点。道らしい跡が残る。

文政三年（1820）着工、付近の村々の協力があり、松本藩領である小倉村より上高地迄は文政七年開通したが、飛騨側は幕領であるのでなかなか許可が下りず、中田又重の協力があり天保六年（1836）漸く貫通したのである。新道は六尺巾の牛道として開通したものの、高山を越えているので積雪のため一年の大半は不通となり、また各所に道路崩壊し、その維持管理に経費がかかった。また新道の利用者が少なく岩岡本家はその為に財産を使い果たし、特に万延元年（1860）五月の大暴風雨にすっかり破壊され、通行がほとんどなくなったので、文久元年（1861）新道は閉鎖されたのである。三十年足らずの短命であった。

飛州新道については、中島正文氏の『神河内誌』に大変くわしい。そして「飛騨新道概念図」と共に「新道町間表」を挙げている。

小滝より3.7km 地点

新道について、「上河内から小倉村迄はさっぱりわからない。」「また地元に聞いても文献を採っても実に要領を得なかった。」としながらも「此の新道は小倉村から鍋冠へ登り、大滝山へ出て蝶ヶ岳の鞍部を越して上河内へ下るもの」と述べている。これによると上高地の平地への下降地点は大滝山、蝶ヶ岳の鞍部より徳沢である。しかし飛騨新道概念図、新道町間表には「徳沢」なる文字は見当たらないのである。概念図は誰が作製したのか判明しないが、新道町間表は天保六年、新道が完成、信飛両国役人から新道の出来栄え見分を受け、新道の通行許可を得るために作製した新道経路の里程表である。新道見分とりわけ町間改用に作成されたものであるから、里程は正確な筈である。

中島氏は当時、飛州新道に消失地名があったので誤ってしまったのではないかと思うのである。また最近『三郷村誌II』の編纂者の降旗正幸氏より、概念図、町間表の「牛道」は「牛首」の間違いであると指摘された。私も「槍ヶ岳開山播隆」の飛騨新道の項に、中島正文氏の飛騨新道概念図、新道町間表をそのまま掲載して最近まで気がつかなかった。大変お恥しい次第である。

横山篤美氏の『上高地物語』では、「短命だった飛騨新道」の項で「飛騨新道または小倉街道とも呼ばれたこの道は、松本西在南安曇郡小倉村より黒沢を上り、鍋冠から大滝、蝶ヶ岳にかかり、上高地徳沢に降り、梓川に沿って下り、明神池近くの与九郎大橋で右岸へ移り、温泉を経て焼岳北の鞍部を越え中尾村へ下る線であった。」と述べているが、上高地へ下降点はやはり徳沢である。また大戦中、地元の国民学校の高等科生徒の大滝越え登山は、大滝小屋の西裏、蝶ヶ岳寄りの現在は廃道となっている道を利用して徳沢へ下っている。この道を地元の人々は「小倉新道」と呼んでいた。したがって地元役場へ問い合わせると、小倉新道を飛騨新道だと返答していた。

『飛騨新道と有敬舎』の巻頭地図「飛騨新道（伴次郎街道）再現図」は、地元で称している「小倉新道」の道筋であり、飛州新道の道筋ではない。

なお『飛騨新道と有敬舎』は、私塾有敬舎創立二百年に当り、岩岡家の子孫達が先祖をたたえるために記念碑を建立すると共に私家版として出版したものである。記念碑建立の祝宴に私は招待を受け、また拙い文を『飛騨新道と有敬舎』に寄稿したが、その中に飛州新道は古池へ下降していると述べている。私は昔から徳沢への急坂には六尺巾の牛道を造ることは無理であろうと思っていた。案の定、現在この道は荒れ果て、下方に砂防堰堤が造られていて廃道となっている。

これまでの説を一歩進めたのが『三郷村誌II』である。小滝（大滝山北岳）から左方徳本峠への尾根道、中村新道を辿り大滝槍見台から曲り沢沿いに徳沢本谷へ下るものである。当時、私は可能性ありと思ったので、この検証は平成20年11月8日に試みた。私は老齢、しかも病身にて登山不可能であるので、実地踏査者は二人

小滝より5.7km 地点

の山小屋従業員に依頼した。大滝槍見台から徳沢へ下りた二人の報告は、「急斜面でこの付近に交易のための六尺巾の牛道を造ることは到底不可能」ということであった。地図上でみても、曲り沢下りの等高線の詰り様は、作道しても廃道の運命にある。検証の策を失った私は、いろいろの文献にかえり、小滝・池之窪・百曲り・古池など地名に目を通しているうちに気がついた。それは信州野沢村（現安曇野市三郷温野沢）庄屋、務台与一右衛門景邦の山行記『槍ヶ嶽道法』である。これは庄屋が残した大量の古文書の中から、降旗正幸氏が発掘したもので、当時の飛州新道、槍ヶ岳、上河内などを物語る大変貴重なものである。庄屋景邦は天保六年（1835）七月、播隆が槍ヶ岳参籠中に槍ヶ岳へ参詣登攀している。次にその全文を掲載することにする。

「小倉より一里半程登り急なり。それより尾根通り半道程登りなし。小倉より牛首まで二里、ここにつめた沢掘割あり。これより鍋冠山の間を登り、掘割より十丁ばかり行って牛小屋あり。ここにも泊ま（れ）るなり。鍋冠南の横手を通る。ここを富士見横手という。二十丁ばかり東より南へまわる。それより一里余り北口へ下るなり。

それより向こうに高山見ゆる。これを手水ヶ嶽（大滝山）といい、この山を少し登りて上口道と鎗ヶ嶽と道分かる。左は上口、右は細道に鎗ヶ嶽道なり。この分かれ道、はなはだ細く名は知れ難し。注連を張りてあり、ずいぶん気を付けかえし。これより分かり（れ）て少し行って小屋あり。ここにも泊（れ）るなり。鍋などあり。これより十丁ばかり大急、登りはなはだ難所なり。道しれ難し。それより手水ヶ嶽中程へ登り、ここにて諸方山々見ゆる。ここは少々水あり。それよりおね通り北へ行くこと十丁ほど。それよりまた下ること大急五、六丁にしてまた登るなり。ここにてまた向こうに大高山あり。これ蝶ヶ嶽なり。

ここへまた登ること久しうして、蝶ヶ嶽中程へ登り、おね通り北西へいくこと半道ばかり、それよりクロを少々行って、大険難所下りあり。これ熊倉沢の坂落しとて大難所なり。一里ばかりの内言語道断なり。それより沢多き中を下ること、半道余ばかりあり。大難所なり。ここを漸く凌ぎ下りつき、梓川あり。これより右の方、川上へ川原を上ること半道ほど行って二ノ股とて小屋あり。ここにて右の方より一ツの沢落ち入り、左の方の本瀬へ付き所でよし。この夜、二ノ股小屋に泊る。

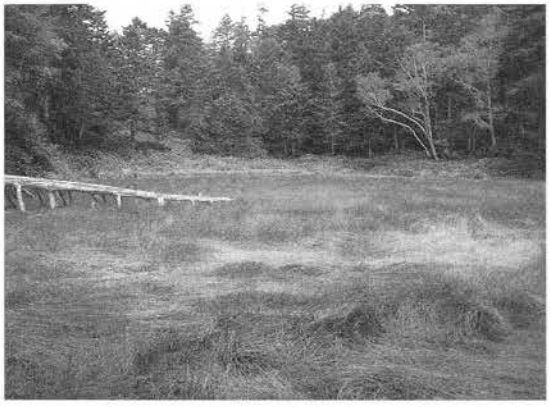
美濃の国伊尾（揖斐）というところの衆四人並びに小倉又重郎と鎗ヶ嶽へ参詣戻りに落ち合い、同宿す。

二ノ股小屋より左の梓川へ付け一里ほど行って、赤沢にて右方より押し出しあり。石皆赤し。この赤沢の中を上へ登ること五、六丁ほど行って、向こうのくろふ（クロ）へ移る。このところに赤嶽（赤沢）の岩穴屋あり。それよりこの梓川原の中を登ること、およそ一里あまり岩島か、はなはだ通り悪し。この川原を詰りまで登りて向こうを見れば、険山嶽々にして空にそびえ、諸々より小沢流れ出る。ここ梓川の水上なり。右の方の山を見れば、山の少しへこみてひくき所あり。これを目の当たりに登るなり。所々に雪の積もりたる所あり。この所大急の登り一里あまりにして、上人様の窟へ着く。下沢よりここまで木一本もなし。嶽松ばかり這いあるなり。二ノ股小屋よりここ岩窟まで二里半あまりなり。

この窟より上人様ご案内にて登山す。岩窟より頂上まで半道ほど。内十五、六丁ほどは大急の登りなり。それより鎗ヶ嶽大鉾先へ登る。ここには草木一本もなし。皆石にて、土は少しもなく、手を立たるごとくにて、登るべき術なし。上人様、去年お開きになられて漸く人の辛うじて登ることを得るなり。頂上に上人様小祠を立て、釈迦如来・観音菩薩・地蔵菩薩・文殊菩薩四尊を勧進す。至心に礼拝し、諸方の山々を遠望すれども、雲虚しく立ち昇り、定かに見えず。朝の内は空すみわたり見ゆる由。この頃は昼時なれば見えかね候。それより下りて上人様岩窟へ泊る。

翌朝未明にまたまた登山致し、太陽の御来迎を拝し、また諸方の高山を遠見す。先ず東に当って浅間ヶ嶽、辰巳（南東）に富士の高根、未の方（南西）の前には乗鞍嶽、向こうに木曽の御嶽、西に加賀の白山、北に越中の立山など見ゆる。また近間の山々は東に常念ヶ嶽、辰（東南東）に兄増り、辰巳に鍋冠・蝶ヶ嶽、南に保高嶽、西に飛州伽多ヶ嶽（笠ヶ岳）、戌亥（北西）に薬師ヶ嶽見ゆる。誠に無双の高山なり。それより上人様の岩窟へ帰り休息して、それより上口ノ湯へ赴く。まず二ノ股の小屋より半道ほど、この方までは、先の道を帰る。鎗ヶ嶽より上口ノ湯まで七里なり。二ノ股小屋より二里半ほど川原の中を川より東を下る。それより川の西へ移る。上口まで川原を離れて一里半ほどなり。上下なく平地なり。川原を離れて少し行って保高大明神の御池あり。東の端に御社あり。一ノ池・二ノ池・三ノ池とあり、これ保高嶽の麓なり。いずれの池も見事な様とも就中二ノ池の景色、誠に無類の景色なり。言語に及ばずに候。

それより上口ノ湯へ行き泊る。この辺、畑あり。蕎麦・稗・粟・麻など作りてあり。早朝に出立致し、また向こうへ十丁ほど行って、またまた小屋掛けて人の住所あり。この所にも畑あり。それよりまた湯へ帰り、帰宅に赴く。まず一里半ほど来たり、梓川原までは、先の道を帰る。川原を越してこの方は古池と言うなり。



小滝より5.8km 地点

古道と思われる周辺には、すでに大木も密集する。

それより蝶ヶ嶽（手水ヶ嶽の誤り）へ登り、一里半ほど大急なり。それより先にきた道へ出、段々小倉へ下り、黄昏時目出度く無難に帰宅致し候。」

庄屋景邦は「此方は古池と言うなり。それより手水ヶ嶽（大滝山）登り、一里半大急なり。」と云って飛州新道を古池より入っているのである。『神河内誌』の「新道町間表」の古池より池ノ窪まで壱里拾七町（約壱里半）に相当するものである。この「古池」からの登り道の検証が、二回目の実地踏査である。平成21年11月10日、これまた二人の屈強な山小屋従業員に依頼、古池より稜線の中村新道まで登り、その状況を調べてもらった。二人の報告によると「山の斜面は一面に熊笹などが背丈位に生い茂り、登りは少々苦労であったが、約三時間半で稜線に出た。古池の下方の斜面は急であるが、登るにつれ緩くなり、上方は殆んど起伏のない平の尾根であった。」という。下方で軟斜面を選ぶようにすれば、交易のための六尺巾の牛道の開削は可能であると判断できる。飛州新道は、大滝山の小滝から「池ノ窪」へ、さらに徳本峠への尾根を辿り、「百曲り」から（古池沢を）古池へ下降したことは明白なことである。ただし「池ノ窪」の地点は消失していて判明しないので、平成22年9月7日、二人の山小屋従業員に検証を依頼、GPSで測量してもらったところ、小滝から大滝槍見台まで、4.4キロメートル、槍見台手前の標高点、2233メートル付近の地点が4キロメートル（壱里拾八間）であるので「池ノ窪」と判断できるのではないかと思うのである。

中島正文氏「神河内誌」昭和16年日本山岳会発行「山岳」による

景邦の『鎗ヶ嶽道法』（務台久彦文書）は、飛州新道の新事実を提供し、具体的しかも明解に述べている。飛州新道は「槍ヶ岳開山」の播隆上人の槍ヶ岳への参詣、通い道である。大滝山で、上高地と槍ヶ岳の道がわかれるのである。景邦は「右は細道に鎗ヶ嶽道なり、この分かれ道、はなはだ細く名は知れ難し、注連張りてあり」と。よく注意していけと記している。

景邦の「鎗ヶ嶽道法」により、いろいろのことが判明してきた。

その第一は、槍ヶ岳長期滞在中（天保六年）の播隆は、槍ヶ岳窟にあり、参詣登山者の槍穂先への登攀や頂上での展望案内をしていた。その第二は、槍ヶ岳山頂に善の網が掛かったことを知ってか、遠く美濃からの参詣登山者もみられた。その第三は、飛州新道の消失地名の位置が判明してきた。「牛首」は、なめし穴山から鍋冠山への上り口の冷沢掘割付近。「大平牛小屋」「富士見横手」は、鍋冠山の東から南への廻り道付近。「大久保」は八丁だるみ付近。

峠を下ると穂高岳方面の山並みが望まれた。

その第四は、蝶ヶ岳尾根から梓川谷へは熊倉沢（槍見沢）を下ったのであり、従来説のワサビ沢ではない。その第五は、当時松本藩の伐採は、槍ヶ岳の山麓の二ノ俣でも行われ杣小屋があった。その第六は、上高地には湯屋以外の人家と畑作物（蕎麦・稗・粟・麻）があった。など、当時の槍ヶ岳や上高地の状況をも知ることができる貴重な文書である。

新道は開削から170年以上も経過、廃道となって久しいので昔の牛道には草木が茂り、道跡も判明しない。これ以上探索しても成果はあがらないと思うので、今回を以って検証を終了することにする。未筆になりますが降旗正幸氏に感謝申し上げます。

（参考文献）
中島正文『神河内誌』（昭和十六年）
横山篤美『上高地物語』（昭和五十六年）
岩岡家私家版『飛騨新道と有敬舎』（平成十年）
『三郷村誌II』第二巻・歴史編上（平成十八年）
『播隆研究』三号（平成十四年）
降旗、今井氏の論考『播隆研究』十号（平成二十一年）

（槍ヶ岳山荘会長　穂苅　貞雄）

人事異動のお知らせ

平成二十三年四月一日付で、副館長の降旗孝浩が中央保健センター所長への異動にともなって、副館長に清水博文が就任致しました。

学芸員には生涯学習課から関悟志が転入しました。動物飼育員の飯島志津が退職し、代わって尾関美穂が着任しました。また事務員の北村洋子が大町市立第一中学校に転出し、代わって細野信子が着任致しました。

山と博物館　第56巻　第6号
二〇一一年六月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六―一 市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二二一
FAX　〇二六一―二二―二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三二九三

R100 PRINTED WITH SOY INK この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。